

日本基督教団 下関丸山教会 会報

まるやま No.71 イースター号

2024年3月31日発行



会報まるやま 71号 目次

- 巻頭言『信仰による救い』・・・・・・・・餅原研一牧師 3
- 『成し遂げられた』・・・・・・・・中野 新治 9
(信徒講壇日奨励)
- 『教会は世の希望です』・・・・・・・・李 泳善 12
(創立記念礼拝説教)
- 『信仰告白』・・・・・・・・餅原 済生 20
(洗礼式において)
- 『お祝いの言葉』・・・・・・・・兼田 清 22
- 『百田信子姉を偲んで』・・・・・・・・餅原 恵美子 23
- 『故百田信子さん・故餅原正子さんを追悼して』・・・教会員 24

表紙イラスト 高山環

巻頭言

『信仰による救い』

聖書箇所…ルカによる福音書八章四六～五六節

下関丸山教会牧師 餅原研一

二〇二三年度も主なる神様のお守りと導きの内に、皆様のお祈りとご奉仕に支えられ、教会の宣教活動が行われたことを感謝致します。

今年度はロシアによるウクライナ戦争やガザとイスラエルの紛争が続き、また今年の元日に発生した能登半島地震などの災害が各地で起こり、さらに未だコロナ感染症は終息に至らない状況です。そのような中で私達の教会は礼拝や教会学校、祈禱会、クリスマス・パイプオルガンコンサートなどを通常通りに行うことができました。また分区や教区の会合などはオンラインや対面で行われ、世界祈禱日や日韓合同礼拝も



開催されて、少しずつ日常を取り戻しながら教会の宣教活動が行われたことに感謝致します。そして今年度は三名の先達が天に召されました。五月一九日に樽見いづみ姉が八六歳で、六月二六日には当教会で七〇年間、礼拝を守られた百田信子姉が八八歳で、更に餅原正子姉が一〇月二〇日八八歳で旅立たれ、残された私達は淋しさの中にあります。今は三名の方が主なる神の御元で平安の内にあることを確信しています。

さてイースター(復活日)は、イエス・キリストが十字架にかけられ墓に葬られ、三日目の日曜日に復活されたことを記念する日です。イースターは教会で最も重要な日と言えるで

しよう。それはキリストが復活された日曜日に、イエスを救い主と信じる人々が教会に集い、復活のキリストを覚える礼拝が始まり、今日まで礼拝が守られているからです。キリストを信じる人々は復活という不思議な出来事を真理として信じ、信仰を守り続けているのです。

この聖書箇所もイエス様の不思議な出来事により、人々の病が癒され復活が起きた箇所です。この箇所の前の四一節に、ヤイロという会堂長がイエス様の足もとにひれ伏して、自分の家に来て下さいと願った。なぜなら、一二歳ぐらいの一人娘が死にかけていたからだと書かれています。この会堂長のヤイロは、ユダヤ教の会堂で礼拝を取り仕切る世話役でした。当時、ユダヤ教の人々はイエス様を敵視し敵対していました。しかし、このヤイロは大切な一人娘を死なせたくない、失いたくないという一心で、会堂長と言う立場も人の目も関係なく、ただ娘を助けて下さいとイエス様にひれ伏し懇願したのでした。そこでイエス様はヤイロの願いを聞き入れ

て、ヤイロの家に向かいます。するとその途中、押し寄せてくる群衆に紛れて一二年間、病で出血が止まらず病気を治したいと願う、医者に全財産を使い果たしても、誰からも治してもらえない女性が近づいて来ました。この女性は、当時の医学では手の施しようのない不治の病にかかっていたのです。昔から病気は恐れられ、移されないように病人は人々から敬遠され、差別をされる人もいました。しかし、それは今も変わりません。コロナに感染した患者さんは当初、面会もできず隔離され日常を奪われ、生き辛さを体験されました。この女性もまわりつく病魔から自由になりたい、また人々の差別から解放されたいと言う思いで、医者に全財産を使い果たしたのです。しかし人の力では直せませんでした。そこで病を癒すと噂に聞くイエス様なら、自分の病も直してくれるかも知れないと、正に藁をも掴む思いで、病を恐れる人々に気づかれないように、群衆に紛れて後ろからイエス様にすがり、その服の房に触れたのでした。すると何とあれ程、悩

み苦しめられた出血が止まったのです。この女性は飛び上がる程に喜んだことでしょう。しかし喜びも束の間、イエス様が「私に触れたのは誰か」と言われ、また「誰かが私に触れた。私から力が出て行ったのを感じた。」というイエス様の言葉聞いた女性は隠しきれないと観念し、震えながら前に進み出たのです。女性は今までのように、病のため嫌われ叱られると思い、恐れて震えたのでしょうか。しかしイエス様は違いました。嫌って叱ったりされません。むしろイエス様は「私に触れたのは誰か」と、苦しみ悩む女性を招かれたのです。このイエス様の言葉は、衣に触れた人が誰か分からずに言った訳ではありません。イエス様に助けを求め、イエス様を信じた心を女性自身に再確認し、確信させるための言葉なのです。その言葉に導かれるまま女性は、イエス様と群衆の前に進み出て、イエス様にひれ伏し礼拝して、触れた理由と病がたちまち癒された事実を皆の前で告白したのです。この女性はイエス様なら誰も癒せなかった病を癒してくれると信

じ、イエス様の衣に触れた。すると長年苦しみ悩まされた病が癒されたと、皆の前で告白したのです。つまりイエス様を信じる信仰告白をしたのです。その女性の信仰告白を聞いたイエス様は「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」と言われ、その信仰を受け入れ祝福されたのです。この個所でイエス様は、信仰によって人の罪は赦され罪の滅びから救われる。だから安心して生きて行くことができるかと教えられたのです。次に四九節で、会堂長の家から人が来て「お嬢さんは亡くなりました。」と告げます。この悪い知らせを聞いたイエス様は会堂長に「恐れることはない。ただ信じなさい。そうすれば、娘は救われる。」と、驚くべき不思議な励まし言葉をかけられたのです。そして家に着くと娘の父母とペトロなど、限られた人しか部屋に入ることを許されませんでした。人々は皆、若くして亡くなった娘のために泣き悲しんでいました。そこでイエス様は「泣くな。死んだのではない。眠っているのだ。」と不思議なことを言われた

のです。人々はすでに娘の反応はなく、息も心臓も止まり死んだことを知っていたので、イエス様の言葉を聞いて、死んだ事実を理解できない可笑しな人だとイエス様をあざ笑いました。しかしイエス様はあざ笑う人々の冷ややかな視線を全く気にせず、娘の手を取り「娘よ、起きなさい」と呼びかけられたのです。する

と娘は、その霊が戻って何と、すぐに起き上がったのです。

その姿を見た娘の両親は非常に驚きました。なぜなら大切な



娘が横たわり何の反応もなく呼吸も心臓も止まったことを、この両親は何度も確認したことでしょう。そして受け入れ難い娘の死に恐れ慄き、絶望のどん底にあった両親の目の前で、死んだ娘が起き上がったのですから、どれ程、驚き喜び

に満たされたことでしょう。そして両親は娘を蘇らせてくれたイエス様に心から感謝し、この喜びを人々に言って、共に喜びを分かち合いたかったに違いありません。しかしイエス様はこの蘇りの出来事を誰にも話さないようにと、お命じになったのです。何故でしょうか。これまでイエス様は多くの人の病を癒し、悩める人の心を慰める奇跡を行って来まし

た。この病を癒すイエス様の奇跡だけが先行して人々に広まり、イエス様が人々に最も伝えたい福音、つまり信じる信仰によって罪の滅びから救われるという神の救いの福音が、十分に伝わっていなかったからです。この本末転倒の状態を正したかったイエス様は、蘇りの奇跡を誰にも話さないように、お命じになったのです。

さて五五節に「その霊が戻って」と書かれています。死んだ娘の霊が戻って起き上がった箇所です。そんな不思議な出来事が、実際あるのでしょうか。実は私には生まれて三日目に亡くなった姉がいました。その姉を出産した時に、母は生

きるか死ぬかの死線を一週間程 さ迷ったことを聞きまし
た。それは暗く長いトンネルの先に光が見え、トンネルを超
えると綺麗なお花畑が目の前に広がり、その先に行くと橋が
かかっている、橋の向こうには亡くなった親戚がいて、「あな
たはまだこちらに来てはダメ、帰りなさい。」と先に行くこと
を止める声が聞こえて、長い昏睡状態から目が覚めたと言っ
たのです。死んだはずの母の霊が戻ったのです。私はその母の
話を思い出しながら、昨年十月二〇日(金の午後十時過ぎ、
身動きせず反応もなく呼吸も心臓も止まって、死んだように
見える母の胸に手を重ね心臓マッサージをしながら、母の霊
が戻って来ますようにと祈りつつ、救急車が来るのを待って
いました。母は救急車で搬送され病院で手当てを受けました
が、急性心不全により八八歳で天に召されました。翌朝、前
の晩に母が作った晩御飯のスープとお粥がある程、母の急な
死でした。その母が残してくれた最後の食事を、最後の晩餐
のように家族で噛みしめて頂きました。実は母と父は十月か

ら毎週一回、洗礼(バプテスマ)を受けるために聖書の学びを
続け、十二月二四日のクリスマス礼拝で洗礼を受ける予定で
した。母はその聖書の学びを始める時、「私はイエス様を信じ
ている。聖書を分かっている。」と言ったのです。そんな母に
私は、「分かっているかもしれないけど、改めて学び直しまし
よう。」と言う程、母は長い間、朝のキリスト教のラジオを聞
いて聖書を学んでいたのです。母が亡くなった今、思い返
せば母の「信じている」という言葉は、正にイエス様への信
仰告白でありました。この信仰によって母は確かに救われて
いることを、私はこの聖書箇所から確信を与えられました。
さらに、この聖書箇所は十月二二日の礼拝の聖書箇所で、二
〇日の母の突然の死をまだ知る由もない私が、一週間前に週
報に予告した箇所でした。正に与えられた聖書箇所から礼拝
の説教準備をする私が、まず慰められ癒されました。それは
昔、昏睡状態であった母の霊が戻ったことが一致し、また洗
礼前の母でもその信仰告白によって救われたと、イエス様が

語られた御言葉が与えられ、そして「恐れることはない。ただ信じなさい。そうすれば、母は救われる。」と私達遺族にイエス様が語りかけられたように感じて、イエス様の御言葉によつて大切な母を突然失った淋しく悲しい心が、慰められ救われたことに感謝しています。

聖書は、人生は死で終わりではなく、キリストの福音を信じて救われ、永遠の命を与えられるという神の約束を教えています。私達は神の力である希望の福音を、来期も伝えていきますように。

最後に「会報まるやま」に寄稿して下さいました皆様、そして編集を担って下さいました富田一恵姉に感謝致します。

新たな年度も、皆様と教会の上に、主なる神のお守りと導きが豊かにありますように、お祈り致します



信徒講壇 十月八日

『成し遂げられた』

中野 新治

阪神タイガースが一六年ぶりのリーグ優勝を果たして、関西はおおいに盛り上がりましたが、優勝の決まった時、岡田監督の胸上げに続いて、背番号二四番のユニフォームが宙を舞いました。二八歳の若さで世を去った横田慎太郎選手のユニフォームです。その引退試合では、病気のために視力がひどく低下していたにもかかわらず、センターからキャッチャーにストライクの返球をし、ランナーをアウトにするという事が起き、「奇跡のバックホーム」と呼ばれました。タイガースの選手たちは亡くなった横田選手と共に戦ってきたのであり、それが、あのユニフォームが宙を舞う光景となったの



です。タイガースにも関西にも、この秋、「特別な時間」が流れたと言えるでしょう。時間には二種類のものがある、という考え方があります。「クロノス」と「カイロス」です。共に、ギリシア神話の時を司る神ですが、「クロノス」は農耕の神で、手に大鎌を持ち、次々と相手をなぎ倒します。つまり、過去から未来へ容赦なく流れる自然時間であり、誰もこれに抵抗することはできないわけです。一方、「カイロス」は前髪は長いが後ろ髪がない、という特異な姿をしています。これは、好機はすぐに捉えなければならず、後になって捉えようとしても手がかりが失われているということ、その姿で表していることになります。特別な時間、かけがえのない時間を表しているわけです。

この二つの時間を使って、人間の生き方について深い洞察を行った神学者が、パウル・ティリツヒです。カール・バルトと共に二十世紀を代表するドイツの神学者ですが、ナチスの支配下にあつて、ユダヤ人であるため迫害を受け、アメリカに渡つて、ハーバード大学やユニオン神学校で教鞭を取りました。彼にとつて「カイロス」は好機を見逃すなという警告者のようなものではなく、自然時間「クロノス」と垂直に交差する特別な時間であり、世界や生きる意味を変容させるものでした。「クロノス」が左から右へ走る直線で図示されるとすれば、「カイロス」は上から下への直線で図示され、それによつてそこに十字架が形成されることとなります。ティリツヒによれば、生誕、結婚、死亡、災害、病い、等々、人間の喜怒哀楽のあるところ、この十字架が形成され、特別でかけがえのない時間が流れるのです。

その最大のものが、神のひとり子イエス・キリストの地上

での誕生と十字架上の死と復活であることは言うまでもありません。以後、歴史的時間は変更され（西暦の設定）、主イエスへの信仰は、その人の人生を根本から変えることとなります（回心）。十字架はキリスト教の象徴ですが、ティリツヒの視点から見れば、それは実体と理念の二重性を持つているのです。ここで、十字架上の刑死がどれほどの苦しみに満ちたものであつたかを確認しておきたいと思ひます。

マタイ、マルコの両福音書とも、イエスが「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ」（わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになつたのですか）と大声で叫び、息絶えたと記しています。ルカ福音書には「父よ、私の霊を御手に委ねます」、ヨハネ福音書には「成し遂げられた」と、最後の言葉が記されています。人間にとつて「カイロス」の受容がいかに困難なものであり、「成し遂げられた」という言葉がいかに重いものであるか、がここに示されていることとなります。この言

葉は、自己の主体が自分にあるのではなく神にあることを認める、極めて大きな意味が含まれているからです。イエスの処刑を見ていた群衆や兵士たちの中には、「神のメシアなら、自分を救ってみろ」と罵った者もいたと書かれています（「ルカによる福音書」）、もしイエスが、自分を守るためにそれを実行したら、キリスト教は成立しなかったこととなります。

ここに示された、自己の主体が神にあることを受容し従うことを、テイリツヒは「神律」と呼んでいます。自分の思いに忠実である「自律」でも、他人の思惑や社会の潮流に従う「他律」でもない、「神律」です。とりとめがなく、不安定な「自律」や「他律」ではなく、神の与えた「カイロス」の時間を生き抜くことこそ、真に自己の生命を燃やすことになると、というのです。

最後に、この「カイロス」を受容し、神の与えた十字架を

荷って生き切った、日本最初の盲人牧師・熊谷鉄太郎のことを紹介したいと思います。熊谷は、明治5年北海道に生まれましたが、父は博打で身を持ち崩し、母は家を去ったので、祖父のいる青森で育ちますが、三歳の時、天然痘のため失明。その後、北海道に戻り、自分を温かく受け入れてくれた札幌教会で受洗、その支援により東京盲啞学校に進学します。横浜訓盲学校の教師を経て、関西学院神学部へ盲人として初めて入学し、牧師となります。関西、中国、九州に赴任し、力強い牧会と共に、生涯をかけて盲人の支援に力を尽くしました。96歳で昇天した時、残した歌があります。「得（う）べくんば またも盲（めしひ）と生まれ来て 見果てぬ夢のあとを追はなん」です。「もう一度盲人として生まれ、やり残したことを果たしたい」というこの言葉は、熊谷がその人生を「神律」によって生き抜いたことを、はっきりと示しています。

創立記念礼拝説教 十一月十九日

『教会は世の希望です』（使徒行伝一章：一―八節）

梅光学院幼稚園園長

李 泳善 （イ ヨンソン）

こんにちは。丸山教会創立一一九周年礼拝を心よりお祝い申し上げます。梅光が長崎から下関に移転する以前から、丸山教会は下関にありました。丸山教会が建てられた年度は日露戦争が起きた年でもあります。世界が混乱した状況でした。

それにもかかわらず、信仰の先輩たちはどんな信仰でこの教会を建てましたか。そして私たちは創立記念日を通して、この教会が今後の一〇〇年をどのように向かえるべきか考える時間になればいいと思います。そのためには、教会の本質が何であるかを考えなければなりません。世界が変わると、教会も変わることがあります。人も変わり、楽器も変わり、形式も変わり、雰囲気も変



わります。しかし変わらないこと、また変わってはならないのが本質でしょう。世界が終わる日まで、主が来る日まで、変わらない教会の本質は何かでしょうか。今日それを考えることで、私たちは、今後の一〇〇年をどのように迎えるかを知ることができると思います。まず、教会の本質について考えながら、私が一つの話をし

私が以前働いていた教会の担任牧師は、北朝鮮の宣教をたくさんした方です。北朝鮮には今でも本質的な意味での教会が存在します。七三年前、朝鮮戦争とともに北朝鮮はキリスト教を途方もなく迫害しました。それで、当時のほとんどの教会は閉鎖しました。牧師とクリスチャンは南に逃げてきました。

しかし、その時、教会を離れることができなかった多くの人々

が北朝鮮に残りました。北朝鮮政府は七三年間、徹底的に教会、教人、信仰を禁止して迫害し、死刑宣告をしました。しかし、今でもその当時のクリスチャン、その子ども、その孫、その子孫が隠れて信仰生活をしています。ところが彼らにとつては教会に關連するものは一つもありません。

彼らには教会の建物はありません。

聖書の本も賛美歌ありません。

牧師もいません。

互いに集まって礼拝することもできません。

しかしそこには教会があります。

それでは、教会の本質、すなわち教会が教会になるために絶対になくてはならないのは、建物でも、聖書の本でもなく、賛美歌でもなく、牧師でもなく、組織でもなく、集まりでもありません。そうすれば、教会を教会にする本質はなんでしょうか。その答えを私たちはみことばで見つけなければなりません。どの時

代、どの地域においても教会とは何ですか？ という質問に答えることができる聖書のみ言葉を一緒に見たいです。

使徒行伝一章一二節を見ましょう。教会の本質第一はイエスの十字架です。この使徒行伝を書いた人は誰ですか。これは、ルカ一章三節を読んで見ることができます。

ルカ1…3

3 そこで、敬愛するテオフィロさま、わたしもすべての事を初めから詳しく調べていますので、順序正しく書いてあなたに献呈するのがよいと思いました。

そして使徒行伝第一章一二節を見てみましょう。

1—2 テオフィロさま、わたしは先に第一巻を著して、イエスが行い、また教え始めてから、お選びになった使徒たちに聖霊を通して指図を与え、点に上げられた日までのすべてのことについて書き記しました。

誰が見ても、ルカの福音書を書いた人が使徒行伝も書いたのです。その人は異邦人であり、医者だったルカという人でした。教会は使徒言行録二章に書かれたように聖霊降臨とともに始まります。しかし、聖霊が来る前に必ず確認しなければならないのはイエス様の十字架です。だからルカは使徒言行録を書く前にイエス様に関するルカの福音書を先に書いたのです。ルカはその福音書でイエス様の御業、教え、イエス様が救い主であることを書いたのです。これから考えてみましょう。教会の本質は何ですか？その答えは明確です：教会の本質はイエス様です。「教会の本質はイエス様です」というこの言葉はどんな意味でしょうか。例えば、教会はイエスをよく知らないといけません。教会にイエス様がないといけません。教会が発展するにはイエス様に似ていない必要ありません・・・このような意味ではないと私は思います。

「教会の本質はイエス様です」というこの言葉は教会＝イエス様

という意味です。どの教会でも「教会はイエス様だ」という言葉です。私たちはこの事実を信じなければなりません。もしそうなら、これも言うことができます。

この丸山教会はイエス様です…という言葉です。丸山教会はイエス様のようになるべきです…という言葉ではありません。

すでにこの教会は一一九年前に創立した瞬間からイエス様です。そしてこれからもこの教会はイエス様です。もっと頑張るのではなく、この教会は完全にイエス様であることを信じなさいということです。皆さん、丸山教会も同じです。

丸山教会はイエス様です。十字架で死んで罪人を救われたイエス様が頭であり、皆さんはそれぞれ肢体です。私たちはイエス様を頭とする共同体になろうとするのではなく、もう既にイエス様であることを信じるべきです。私たちに任せられたことは、イエ



ス様の残された仕事、すなわち十字架の救いを成し遂げることで、十字架はユダヤ人にはつまずきで、ギリシヤ人には愚かなものです。

しかし、十字架はそれを信じる人にとっては救いであり、力です。教会は十字架について沈黙してはいけません。これが教会の危機になる可能性があります。私たちは、世の中で愚かな者になるより、神様の前で愚かな者になることを恐れなければなりません。教会はイエス様であり、イエス様は十字架です。だから教会は十字架です。それで、教会の建物の一番高い所に十字架を置くのです。

使徒行伝一章三節を見ましょう。

3 イエスは苦難を受けた後、御自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話された。

教会の第二の本質は復活です。使徒言行録二章で初代教会が始まる前、ルカは確かに復活を先に言います。使徒言行録に出る弟子たちのメッセージも短くて明確でした。それはイエス様が復活されたということです。

使徒行伝二章で聖霊が降臨し、人々がその姿を見て驚きます。その時、ペテロが有名な説教をします。そしてその説教の結論はまさにイエス様が復活です。

使徒行伝二章：三十二

32 神はこのイエスを復活させられたのです。わたしたちは皆、そのことの証人です。

私はクリスチャンの家庭で生まれ、幼い頃から教会に行きました。大学生時代には教会に行かない時期もありました。ところで軍隊の義務を終えて帰って来たら再び教会に行き始めました。電車がレールの上を走るように、私の人生は信仰というレール

ルの上を走らなければならないと思つたからでした。その頃、日曜学校の教師を始めました。ところが学生たちに聖書を教える時、他の聖書の箇所とは違って、復活を教える時はなんとなく自信がありませんでした。その理由について深く考えた期間がありました。そしてその理由を見つけました。それは自分自身が確実に復活を信じていないからでした。私は幼い頃から聖書を見て、復活を知りました。しかし、私の口で復活を確かに信じると告白することはできませんでした。ただ熱いジャガイモのように直面していませんでした。私はその時期に神学校に通っていました。

実際、神学校に行く前に、神学を勉強すれば、信仰がより良くなると思いました。ところが神学を勉強し、信仰がより弱くなりました。そのころ私が勉強した本が一冊ありました。その本のタイトルは「Faith for understanding」でした。この言葉の意味を詳しく考えてみました。理解のための信仰です。

しかし、じつと考えれば、この世界はその逆です。つまり

「Understanding for faith」です。言い換えれば、世界は理解して、納得してから信じます。家を買う時は説明を聞いて、納得してから契約書に印鑑を押します。何を信じてもその前には証拠を見せるべきだと思います。説明を聞かなければならないと思います。知ってから信じます。

ところが世界で重要なのはその逆です。信じてこそわかるのです。たとえば、私が下関駅までの道を知らず、誰かに尋ねると考えてみましょう。

その人が説明をしてくれます。私はまずその人の言葉を信じます。そしてそのまま行くと下関駅が出ます。その時その道を知ることですね。信じなければわからないのです。

結婚もそうです。結婚式ではお互いが宣誓をします。もし完全に分かってから信じると考えて次のようなことをすると想像してみましょう。

夫と妻がお互いに健康診断書を相手に出します。毎年自分が知らない借金がないことを確認します。毎日毎日お互いに浮気してないかチェックします。このようにお互いを毎日知って行く夫婦が幸せな夫婦になるわけではありません。婚する日、夫は妻に信仰として宣言します。そしてその信仰でお互いを信頼します。そして一生お互いを知っていくのです。即ち信じてから分かることです。

神様との関係もそうです。私が神学を勉強したからこそ神を知るようになることはありません。神様を知るためにまず神様を信じなければなりません。なぜなら神様は信仰の目でこそ見える方だからです。私の信仰によって神様がおられ、その方が私を愛する方であることを信仰として宣言する時、その信仰の目で、私たちは神様を見ることができなのです。

復活も同じです。復活は信仰であり、選択であり、決断です。

復活を信じる決断をした時、神様は復活の信仰をくださるので、復活が信じられれば、聖書がすべて信じられるのです。

救いとはこの世から与えられるものではありません。その救いをくださる神様は、世界の原理を超越する方です。無から有を創った方は死者をよみかえらせる方です。世界の中にあるものを求める時、世界中にいる人に頼めばいいです。

しかし、永遠の命は、世界の外にあります。救いは、世界を超越した方に求めるものです。その神様のひとり子イエスは、私たちに永遠の命を見せるために復活された方です。この復活が教会の本質です。ですから、私たちは絶望の中で希望を持っています。

私達は死の中に命を持つものであり、暗闇の中で光を見つけたもので、十字架の中で復活を見つける者です

ハレルヤ イエスは死から復活しました。

使徒行伝一章四―八節を見ましょう

4 そして、彼らと食事を共にしていたとき、こう命じられた。

「エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。 5 ヨハネは水で洗礼を授けたが、あなた

がたは間もなく聖霊による洗礼を授けられるからである。」 6

さて、使徒たちは集まって、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのには、この時ですか」と尋ねた。 7 イエス

は言われた。「父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない。 8 あなたがたの上

に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」

教会の第三の本質は聖霊です。なぜなら、教会自体は聖霊降臨によって誕生したからです。

四節を見れば、弟子たちにとってエルサレムはすぐに去りたい

ところです。エルサレムは政治家や宗教家や既得権者がイエスを十字架につけた場所です。イエス様が復活されましたが、彼らは今でも強い力を持って社会を支配しています。しかし、弟子たちは十字架と復活の場所を離れてはいけませんでした。なぜなら、そこにすぐ聖霊様が来られるからです。聖霊様はイエス様の代わりに私たちを導いてくださる神様の御霊です。

イエス様は八節にこう言われます。

8 あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。

そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。

そして本当に一〇日後に聖霊が降臨しました。そして力がなく、絶望し、恐れていた弟子たちが力を得ました。今日、教会は聖霊の力を求めなければなりません。

しばらく前に、ある教会の牧師先生と話す機会がありました。

先生は言いました、一〇年前に梅光大学の学生だった人が洗礼を受けるということです。私は一〇年前にその学生に学校で聖書を教えました。その時福音を聞いた学生が一〇年後にバプテスマを受けるようになったわけです。私はそれを聞いてとても感激しました。

聖霊はまるで光のようです。

部屋が真っ暗になると、その部屋が汚れているか綺麗かも分かりません。ところが、光が入るとその部屋がどれほど汚れているのか体感できます。多くの人は福音を聞いても反応はありません。

しかしその人に聖霊が臨むと、その魂に光が入ります。そうすれば、自分がどれほど罪人なのかわかります。そして救いを探します。そしてイエス様を救い主として探します。

聖霊はその人の内面を照らす光です。また、聖霊は油と同じです。

礼拝と賛美と私たちの生活に聖霊様が油を注いでくださいます。そうすると礼拝が変わります。賛美が変わります。私たちの生活が変わります。

主の恵みが皆さんと共にありますようにお祈りします。



十二月二四日

『信仰告白』（洗礼式において）

餅原濟生

私は鹿児島県の種子島で一九三六年（昭和十一年）三月二〇日、十二人兄弟の末っ子として生まれました。私の父親は親から引き継いだ精米業を生業（なりわい）として家族を養ってくれました。

私は家族、特に祖母から大切に育てられました。しかし母親が亡くなって以降、父親の精米業も上手く行かなくなり、戦争も重なって、精米業を手放し廃業してからは、貧しい生活が続きました。戦時中、小学生であった私は親元を離れ、種子島から鹿児島に疎開しました。終戦後、疎開地の鹿児島



から種子島に帰り、学校を卒業してからは地元の工場で働きました。

また大阪にも何度か出稼ぎに行く生活が続きました。そんな中、種子島で妻（正子）と

出会い一緒に生活が始まりました。最初の子供は難産で亡くしましたが、二人の子供に恵まれました。その後も家族を残して出稼ぎが続きましたが、二七歳の時に大阪へ家族四人で引越しました。長男が三歳、次男が二歳の時でした。大阪の会社に勤め、大阪での生活が始まりました。

私の休日の楽しみと言えば、当時流行っていた映画鑑賞です。特に私は西部劇などの洋画を映画館に良く見に行きました。洋画の場面では家族で日曜日に教会に行くシーンが多く印象的でした。特に『ベンハー』という映画では、灼熱の太

陽の下、ベンハーは捕虜となり連行され、ローマ兵に鞭打たれ倒れ込んだ時、キリストが一杯の水を差し出し命が救われるシーンが印象に残りました。私は洋画を通してキリスト教会に対し良いイメージを持っていました。

子供達も成長し、次男が友達に誘われて教会に行き出した時、私の洋画の影響もあったと言う程、数多くの洋画を家族で見た物です。そして一九七八年(昭和五三年)四二歳の時にマイホームを購入しました。そこで息子達も其々、学校を卒業し、会社に就職し結婚して独立して行きました。

そして夫婦二人の生活が続いていた二〇一八年九月四日に台風二二号が大阪に直撃し、自宅は被害を受けました。今後、自宅をリフォームするか引越すのか思案した結果、五六年間の大阪での生活に終止符を打って、二〇一九年八月に下関に引越す事となりました。それからは毎週日曜日、夫婦で

教会に通う様になりました。教会の皆様には、私達夫婦を快く受け入れて下さり、心より感謝致します。

私達夫婦は息子達が学生の頃、教会に行く様になってから、下関に引越してから朝、ラジオでキリスト教の番組を聞いていました。特に妻(正子)はキリスト教の番組を熱心に聞いていたので、牧師である息子から一二月二四日のクリスマス礼拝で洗礼を受けないかとの話を聞いた時、喜んで承諾しました。そして一〇月から毎週水曜日の午後、洗礼前の学び会を十二月まで続けました。その洗礼前の学び会の初回で妻は「昔から私はラジオで聞いていたから、私はイエス様を信じている。聖書を分かっている。洗礼は遅い位だ。」と言っていた事を思い出します。その信仰を告白した妻が十月二十日に天に召されました。

妻に心より感謝し、妻の意思と共に本日、洗礼を受け、イエス・キリストを私の救い主として信じ受け入れます。

『お祝いの言葉』

教友 兼田 清

餅原済生兄弟、受洗おめでとうございます。心より祝福申し上げます。

パートナーである奥さまに先に召されるのは本当につらいことです。ただこれからは、私たちみなに主にある兄弟姉妹になります。

主にある兄弟姉妹が増えることは、こんなにうれしいことはありません。主にある喜び、これは半端なものではないですよ。

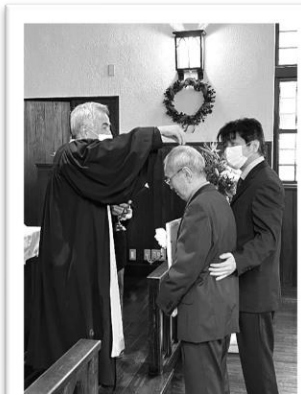
共に主にあつて、共に歩んでいきましょう。

イザヤ書四十六章四節の御言葉が頭に浮かびました。

わたしはあなたたちの老いる日まで、白髪になるまで背負つていこう

わたしが担い、背負い救い出す。

本当におめでとうございます。



『百田信子姉を偲んで』

餅原恵美子

百田さんに初めてお会いしたのは、十二年前のイースターでした。下関丸山教会からお招きを頂いて、イースターの礼拝説教をすることになった餅原牧師に同行して、私は下関丸山教会の皆さんと初めてお会いしました。

「百に田んぼの田」と百田さんは、元気に自己紹介をしてくださいました。

丸山教会の中心となって奉仕をされていた百田さんには、たくさんの方を教えて頂きました。言うことは言う、する事はする、行動しながら考えておられる百田さんのペースに引き寄せられ、気が利かない私も動けるようになりました。

土曜日は、教会のお掃除と礼拝堂のお花を活けに来てくださり、一緒に礼拝準備をしていました。また、教会に来られ



ない方々のご自宅や施設を定期的に訪問して、共に讃美歌を歌い、聖書を読み、お祈りをしました。お菓子や教会の写真を広げて話をする中で、教会との繋がりを感ずるようになりました。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっておれば豊かに実を結ぶ」

イエス様を求め、イエス様につながっていた百田さんのご奉仕は、たくさんの実を結び、教会に集う私達を励ましてくださっていました。イエス様のもとで百田さんは丸山教会に集う私達のために、今日も気合いを送っておられることでしょう。



百田信子さん



百田姉は18歳で受洗されて以来、88歳で天に召されるまでの70年間、この教会で礼拝を守り、教会の役員や礼拝堂の花当番と掃除も担って下さいました。また、ご高齢の教会員の訪問にはデザートを用意され、施設で賛美歌を歌い、聖書の御言葉を聞き、楽しく会話をしたことが思い出されます。(餅原研一)

人に対して遠慮無く、ポンポンものを言う百田さん、美人でちょっと強面?の百田さんでしたが、幼い子供を連れて教会に通っていた時代、百田さんは思いがけない気配りや優しさを、私や子供たちに示して下さいました。物言いは素っ気なくいっても、行動からはありったけの好意がにじみ出る、、そんな百田さんが今、とても懐かしいです。(高山)

百田さんの前に行くと背がピンと伸びます。

良き先輩、ありがとうございました。

(清水順子)



バザーをはじめ、教会のご用をいつも先頭に立ち、私達を叱咤、そして激励!して下さったお声が今も響いてきます。たくさんの思い出、ありがとうございました。(中野直子)

「信仰の創始者、また完成者であるイエスをみつめながら」

百田さんからいただいたしおりに記されていることばです。聖書・賛美歌と共に大切なものになりました。人生の、そして信仰の先輩として、たくさんのお働きに心から感謝いたします。(岡野千代子)



2016年9月よりの交わりでした。賛美歌「うるわしの白百合」を捧げます。アーメン

(兼田清)

今も、頭の上の方から「あんた、しっかりしなさいよ」というこえが聞こえてくるようです。バザーの時、一緒にうどん作りに励んだことが、とても懐かしいです。(中野新治)

今年度天に召された百田信子さんと餅原正子さん、礼拝や愛餐会、バザーなどをご一緒した思い出深いお二人です。教会員の皆さまにお二人の思い出を語ってもらいました。



餅原正子さん

母は大きな愛を持って、家族を見守ってくれました。住み慣れた大阪から下関に来て、教会の礼拝にも出席し、神の愛に出会って、福音を信じてくれたことに感謝しています。
(餅原研一)

お話好きの正子さん、誰に対してもニコニコしながらご自分から優しく話しかけられていましたね、

「あのな、、」「それでな、、」特にご兄妹やご家族のことを話される時は普段にもまして幸せそうでした。愛に溢れる正子さん、クリスマスの、旦那様の洗礼式、感動的でしたね！天国からきっとご覧になってましたよね！

(高山環)

「いいから♪いいから」といつも笑顔で和ませてくれてありがとう！
(餅原恵美子)

いつもにこやかな笑顔で接してくださいました。

詩編23：6「命のある限り恵みと慈しみはいつもわたしを追う」を捧げます。アーメン (兼田清)



餅原先生や恵美子さんとお話されている時のやさしい笑顔がとても幸せそうで私もうれしくなりました。(清水順子)

いつもやさしい笑顔で接してくれた正子さん。手仕事もお上手でした。正子さんの作られた布の袋、大事に使いますね。

(富田一恵)

『編集後記』

富田一恵

今より若いある時、早朝に車で出勤していました。交通量も少なく歩いている人もほとんどいない道の、とあるバス停で、若者が一人バスを待っていました。

とても大きなトランクを横に置いていて、トランクにはステッカーがいっぱい貼ってありました。そのステッカーは、たぶんその人が世界中の多くの国々を旅したあかしのように見えました。

車で通りすぎる一瞬で見えて、そのまま職場へと走り去って行っただけのことですが、私はその場面を忘れられません。どんなにその人が世界中に行こうとも、その人は家の布団から起きて、最寄りのバス停でバスを待つことから始めるのだ、ということに気が付いたのです。

繰り返し思い出すこのことを、また最近思い出します。

「会報まるやま」に多くのご投稿をいただき感謝します。

パソコンでの編集の仕方を、かなり忘れていて四苦八苦しましたが、みなさまの原稿を読んでいるうちに、バス停の場面を思い出したように思います。

また布団から出て、最寄りのバス停でバスを待つことから始めよう。年を取っていてもかまわない。神さまが連れて行ってくださるはずです。

会報まるやま 71号 (イースター号)

2024年3月31日発行

〒750-0019 下関市丸山町 4-1-8

Tel/Fax (083)222-5931

